

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介します



合田 直弘

7月4日にエプソムで行われたG1英オークス(芝12F6y)を9馬身差で圧勝し、16年のマインディング以来4年振り史上49頭目の3歳牝馬2冠を達成したラヴ(牝3、父ガリレオ)が、今月のこのコラムの主役である。

勝ち時計の2分34秒06は、17年にエネイブルが作った記録を0秒07更新するオークスのレースレコードで、同日に同競馬場で行なわれた英ダービー(芝12F6y)より0秒37速いものだった。そして、7月9日に発表されたワールドランキングでも、英ダービーを5、1/2馬身差で快勝したサーペンタイン(牡3、父ガリレオ)の120を2P上回る、レイティング122をラヴは獲得し、世界トップ10入りを果たしている。ちなみに、同世代の日本ダービー馬コントレイルもラヴと同等の122を獲得し、世界十傑に名を連ねている。

ラヴはクールモアの自家生産馬。母ピカブー(父ピヴォタル)は、現役時代は5戦して未勝利に終わった馬だが、3番仔のラッキークリステイル(父ラッキーストリー)がG2ロウザーS(芝6F)など重賞2勝、5番仔のフラッターリング(父ガリレオ)がG3ミュンスターオークス(芝12F)勝ち馬、6番仔のピーチツリーがG3スターネーラス(芝14F)勝ち馬、そして7番仔がラヴと、母としては極めて優秀な成績を残している。

そして、母の1歳年下の半弟に、G2チャレンジS(芝7F)など3重賞を制したアラビアングリーン(父カイラキー)、母の3歳年上の半姉ライトクエストの孫に、今年のG2マイラーズC(芝1600m)で3着となったのを含めて、重賞入着が3度あるヴァンドギャルド(父ディープリンパクト)がいる牝系の出身だ。ヴァンドギャルドの母で、現役時代はG3フィードボール賞(芝2100m)を制したスキアは、現在も社台ファームで繁殖生活を送っており、2歳世代のフォティノス(牝2、父ドウラメンテ)は7月11日に阪神の新馬(芝1600m)でデビューし2着となっている。さらに、スキアには父ダイウメジャーの1歳牝馬がいるが、こうした馬たちにとっては、ラヴの出現は極めて重要なカタログ・アップデートとなった。

ピヴォタル牝馬にガリレオという配合は、現役で5つのG1を制している(7月20日現在)マジカル、17年にG1ブリティッシュチャンピオンズ・フィリーズ&メアズ(芝11F2100m)など2つのG1を制したハイドレンシア、18年にG1英千ギニー(芝8F)、G1愛千ギニー(芝8F)を連覇したハーモサ、マジカルの全姉で18年のG1ロッキンジS(芝8F)など3つのG1を制したロードデンドロンらと同配合となる。

ガリレオが父サドラーズウェルズの祖

母として、ピヴォタルが祖父ヌレイエフの母として、名繁殖牝馬スベシヤルを保持しており、この配合はスベシヤルの4×5を形成する。同馬のインブリードと言えば、少し前と言えばG1サンクルー大賞(芝2400m)を含む3つのG1を制したエルコンドルパサーがスベシヤルの4×4を持っていた他、今年のG1愛千ギニー(芝8F)勝ち馬ピースフル(牝3、父ガリレオ)もまた、同馬の4×4を持つ。ヌレイエフとサドラーズウェルズを保持していれば出来るインブリードだけに、このパターンは今後も欧州の競馬シーンにしばしば登場することになりそうだ。

ラヴは2歳時に7戦も消化し、G1エイグレアスタッドS(芝7F)など2重賞を含む3勝を挙げる活躍を見せていたが、今季初戦となったG1英千ギニー(芝8F)を4、1/2馬身差で、そして冒頭でも制したようにG1英オークスを9馬身差でべて数段階スケールアップしており、シーズンオフの間に大きく成長したことは明白だ。

今後見られるはずの、エネイブル(牝6)を始めたとした古馬勢とラヴの顔合わせは、大きな話題を呼ぶことになりそうだ。